学校と地域の協働を、次のステージへ



今ある活動を見直し、
子どもの学びと地域の可能性をひらく

鹿児島大学教授　金子 満



新しい行事を増やす前に、今ある活動の「目的」と「関わり方」を見直す。

学校にも地域にも、
これ以上の無理を重ねないために。

今日の3つの持ち帰り

01 なぜ今、変化させる必要がある？

02 CSと協働活動をどうつなぐ？

03 熟議で既存活動をどう組みなす？

終盤は、寄せられた現場の質問に具体的に答えます。

従来のやり方が、続けにくくなっている



- 少子高齢化・人口減少で担い手の条件が変わる
- 学校と地域の活動を支える人が固定化する
- 同じ活動を「同じ人数・同じ手順」で続けるのが難しい

問題は現場の熱意不足だけではない。

学校に求められる役割は、広がっている



- 授業・学習指導に加え、生活上のさまざまな課題への対応
- 学校行事、地域との連絡、支援人材の調整も重なる
- すべてを教職員の善意や追加業務に頼れない

学校が担うべき教育上の責任と、分担可能な仕事を区別する。

学校だけで、子どもの学びを支え切れるか

学校の教育的な専門性と、家庭・地域が
持つ経験や関係。どちらも必要です。
教育責任を丸投げする話ではありません。



教育基本法第13条が示していること：

学校、家庭及び地域住民等の相互の連携協力

学校、家庭及び地域住民その他の関係者は、教育における
それぞれの役割と責任を自覚するとともに、相互の連携及
び協力に努めるものとする。

重要なのは「学校の仕事を地域に渡す」ことではなく、それぞれの役割と責任を自覚して、支え合うこと。

では、何を変えるのか

人をもっと集める前に、活動の「ねらい・役割・方法」を考え直してみませんか。



従来の活動を否定せず、受け継ぐ価値を確かめる。

似ているけれど出発点が違う

CS／学校運営協議会



地域住民や保護者等が、学校運営の基本方針などを協議する仕組み

基礎的な捉え方：
学校運営の基本方針、学校と地域の連携方針、教職員の任用に関する意見などを「協議」する制度的基盤。あくまで方針の決定や議論が中心。

地域学校協働活動



学校と地域が協働して、教育活動や地域の活動を具体的に進める取組

基礎的な捉え方：
協議された方針に基づき、具体的な教育活動や地域活動を「実践」する活動。実際の行動や協働が中心。

協議の制度と、実践の活動を混同しない。

CSには制度上の役割と権限がある

1. 校長が作成する学校運営の基本方針を承認する
2. 学校運営について教育委員会や校長に意見を述べる
3. 教職員の任用について一定の範囲で意見を述べる

学校運営の具体的な実施権限や責任は校長・教育委員会等にある。

実際の学校運営協議会で起こりやすいこと



承認という重要な役割と、実質的に話し合うことは両立できる

会議の問いを一つ変えるだけで



学校運営の方針と、地域での実践を結び付ける問い。

地域学校協働活動の幅を広げる

「学校支援」は必要。その意味や方法を豊かにする。

これまでの大切な役割

- 学校からの相談・依頼
- 地域の協力者を探す
- 授業・行事を支える

さらに目指す関係

- 学校と地域が課題を共有
- 地域資源を生かし活動を改善
- 子どもの学びと地域に還元

一体的推進は、行き来できる関係をつくること



一体化＝すべてを学校運営協議会で決めることではありません。

ここが今回の提案です



制度を増やすのではなく、
すでにある会議と活動をつなぎ直す。

カードは、その「つなぎ直し」を考える一つの方法です。



人には、いくつもの顔がある

- 学校では「保護者」でも、
  地域では技術を持つ人かもしれない
- 「協力者名簿」に載らない経験や強みがある
- 子どもにも、教室外で見えてくる力がある

人を役割の名前だけで理解しない。
パズルピースの考え方

同じことができる人を
集めるだけではなく、
違う力が重なる場をつくる。



人を「使う」のではなく、それぞれが無理なく力を発揮できる条件へ。

「人を探す」から「関わり方を考える」へ

役職でお願いする



※断りにくく負担が集中

VS

できることから関わる



**短時間・単発・得意なことを生かした参加の入口をつくる。
そこでカードを使ってみます**

このカード研修は、何のため？



**架空のカードで、
組み合わせて考える方法を学ぶ。**

熟議に役立つ「選択肢の生み出し方」を、
架空の条件で練習する。

この後は架空のカードで考え方を体験し、続いて実際の地域への応用方法を説明する。

※カードの答え＝実際の地域の答え、ではありません。

架空の「さくら小学校」：今ある地域探検

学校の教育目標（仮定）

地域に親しみ、
自分で問いを持ち、
考えを伝える子ども

新しい行事ではなく、今ある活動を少し見直す設定。

既存の3年生「地域探検」

地域の案内役が説明し、子どもが話を聞いて記録する。
案内役が固定化しがち。

CSの熟議と、カードの役割は分ける		
CSで： 目標と課題を共有	本講演で： 発想法を模擬体験	現場では： 調査した後で再検討
学校運営協議会で突然カードを引き、企画決定するわけではない。		

3種類のカードを使います

地域カード

地域の条件

人口・暮らし・
地理・活動環境

ピースカード

住民ができること

経験・得意なこと・
参加の可能性

チャレンジカード

予期せぬ変化

制約やトラブル
への対応

学校の教育目標はカードを引く前に共有します。

地域カード：架空の背景条件



人口が減少し、協力者が固定化

住宅地と小さな商店街のある校区



地域カードは、実際の地域を調べた結果ではありません。

ピースカード：住民が「できること」5枚

01	02	03	04	05
昔の暮らしを話せる	地域の道を案内できる	商店の仕事を伝えられる	写真で活動を記録できる	子どもの問いを聞き取れる
地域の高齢者	地域住民	地元の店主	PTAの保護者	対話が得意な住民

5枚を全部使う必要はありません。誰が協力するかは現実の場で確認。

どの組み合わせを考えますか？

子どもが問いを持つ → 使いたいピースを2〜3枚選ぶ → 既存の授業にどう取り入れる？

一つの正解を決めるより、複数の可能性を考えてみる。

地域探検を「新しい行事」にしなくても

これまでの活動例

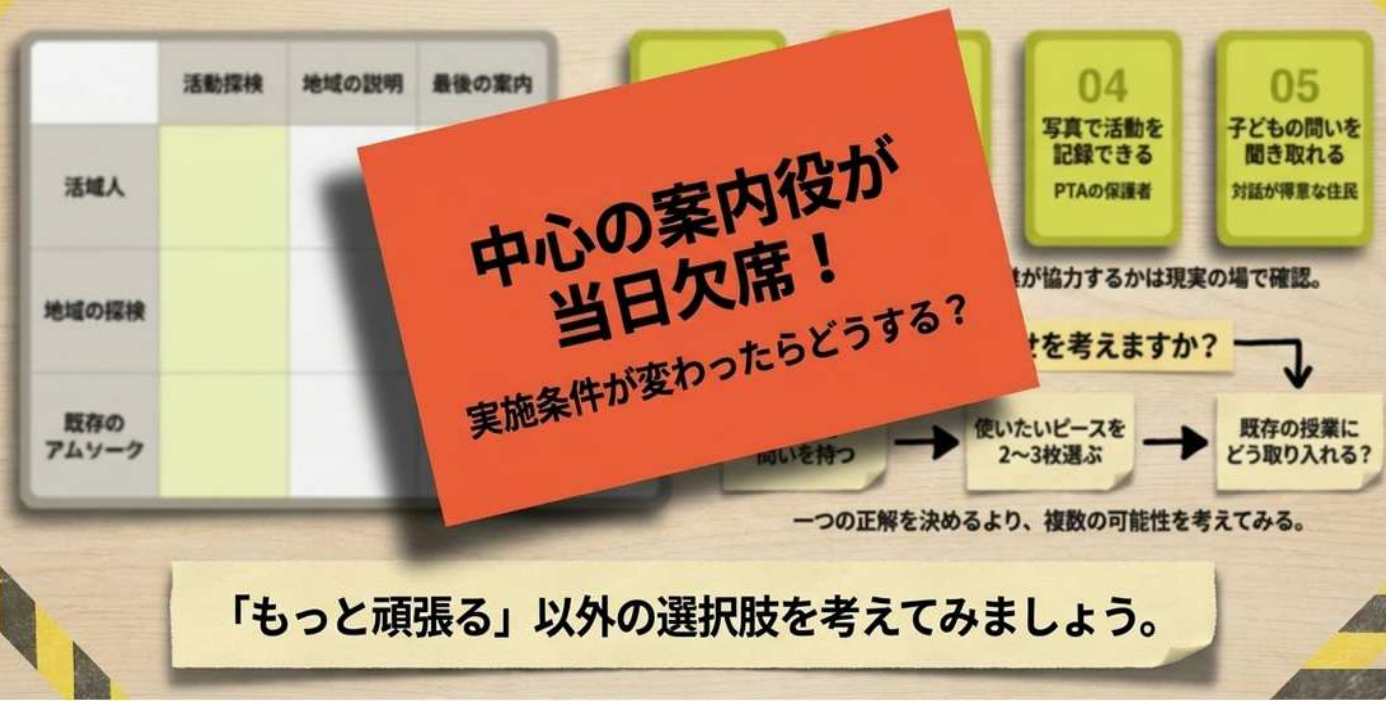
- 道順は決まっている
- 案内の説明を聞く
- 最後に感想をまとめる

考えられる工夫の一例

- 子どもが事前に質問を選ぶ
- 住民と短い対話を行う
- 授業内で発見地図を作る

新しい展示会やイベントは増やさない。既存の学び方を組み直す。

ここでチャレンジカード！



「もっと頑張る」以外の選択肢を考えてみましょう。

トラブルが起きたとき、何を変える？

中心の案内役が
当日欠席！
実施条件が変わったらどうする？

訪問先や
移動ルートを
絞る

学校内で聞き取りや
資料学習へ変更する

安全や学習条件を
満たさなければ
延期する

実現できない企画を無理に成功させる必要はありません。

カードで身につけたいのは、発想の方法

人の違い・地域の条件・
突然の変化を組み合わせ、
選択肢を増やす。

生まれたのは
「実行決定」ではなく、
熟議の材料。



研修のカードと、
現場の地域は違う。

研修のカードと、現場の地域は違う

研修では与えられる	現場では自分たちで確かめる
架空の人口構造や地域条件	本当の地域の条件
住民のできること5枚	住民の能力・関心・参加意向
突然の欠席などの変化	実際の責任・費用・安全

まず調べて理解し、議論の材料をつくる。

自分たちの「地域カード」は調べてつくる

- ☑ 学校の教育目標と既存活動・課題
- ☑ 地域の人口・交通・産業・文化・団体
- ☑ 場所・時間・予算・負担などの条件



統計、既存寄料、
日頃の対話から
小さく始めればよい。

実際の「ピース」を見つける3つの問い

01

どんなことが得意・好きですか？

02

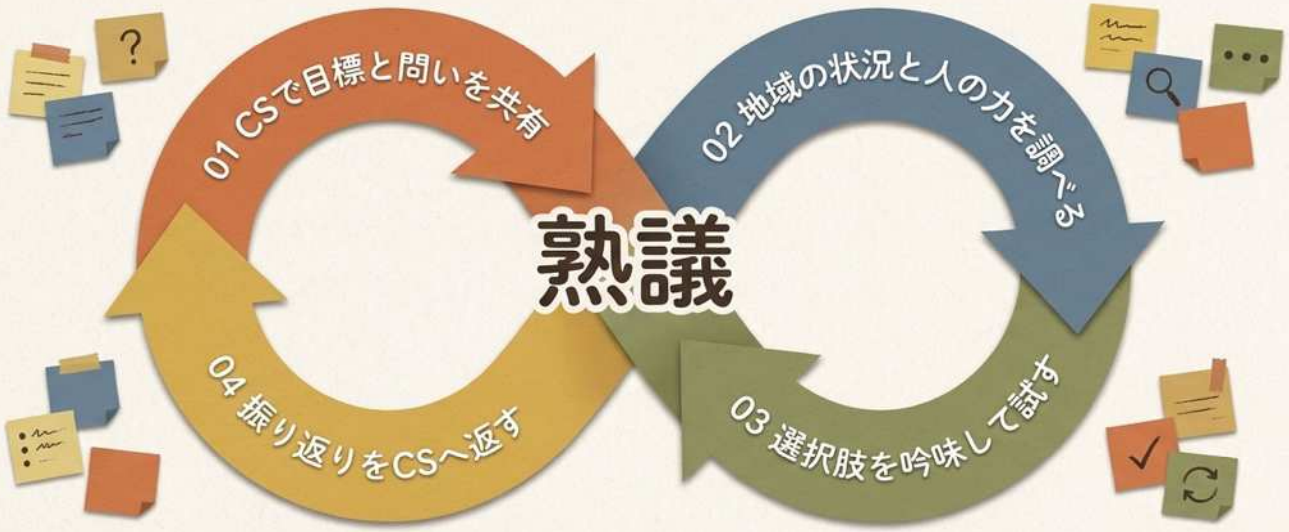
どんな形なら関われそうですか？

03

難しいことや必要な条件はありますか？

住民・PTA・地域団体・企業等へ。本人の意向と個人情報の扱いも確認。

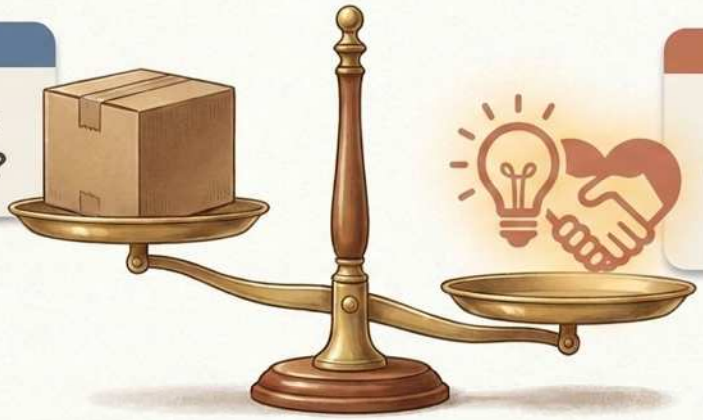
カードを離れ、実際の熟議へ



付箋やホワイトボードでよい。カードを使い続けることが目的ではない。

継承とは、同じ形を守り続けること？

残したいのは
行事そのもの？



それとも、
そこで生まれた
学びや関係？

必要な価値を受け継ぐために、手段は変えられる。

３つの判断：残す・変える・手放す



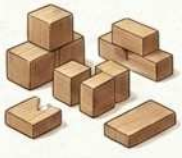
01 残す

子どもの学び・
地域との関係



02 変える

役割・参加方法・
活動形態



03 手放す

目的を失った慣例
・過重な負担

「新しく創る」は、組み直した先に生まれる可能性。

地域探検で、何を残し何を変える？

残したいもの

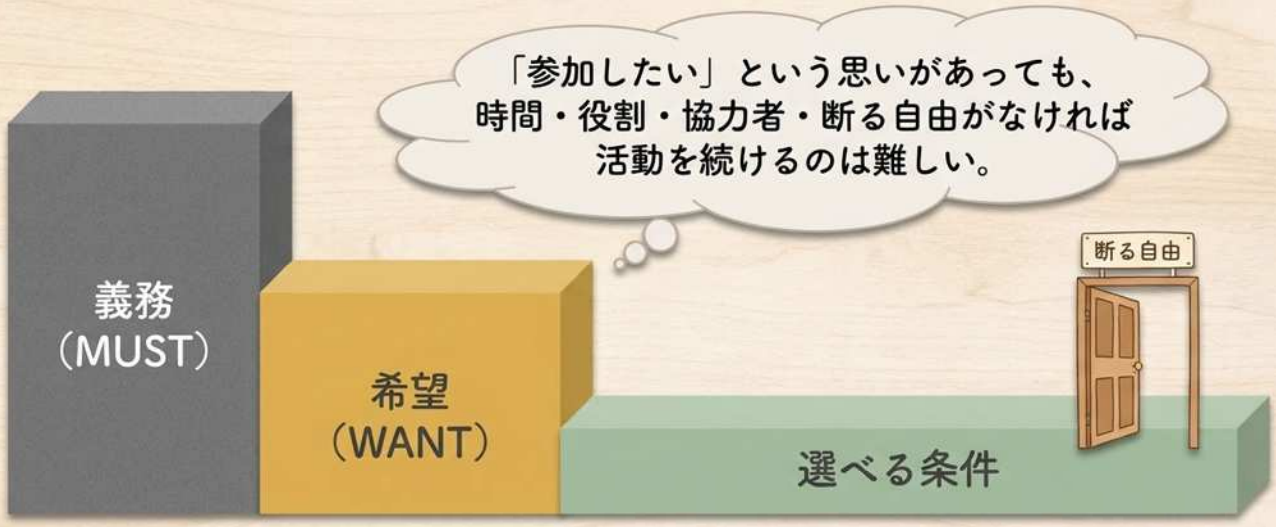
- 地域の人と子どもの出会い
- 子どもが問いを立てる学び
- 地域への関心

変えてもよいもの

- 毎年同じ案内人に一任
- 同じルートで一方向の説明
- 負担が集中する準備方法

守る価値が分かると、手段は柔軟になる。

MUSTからWANT、そして「選べる条件」へ



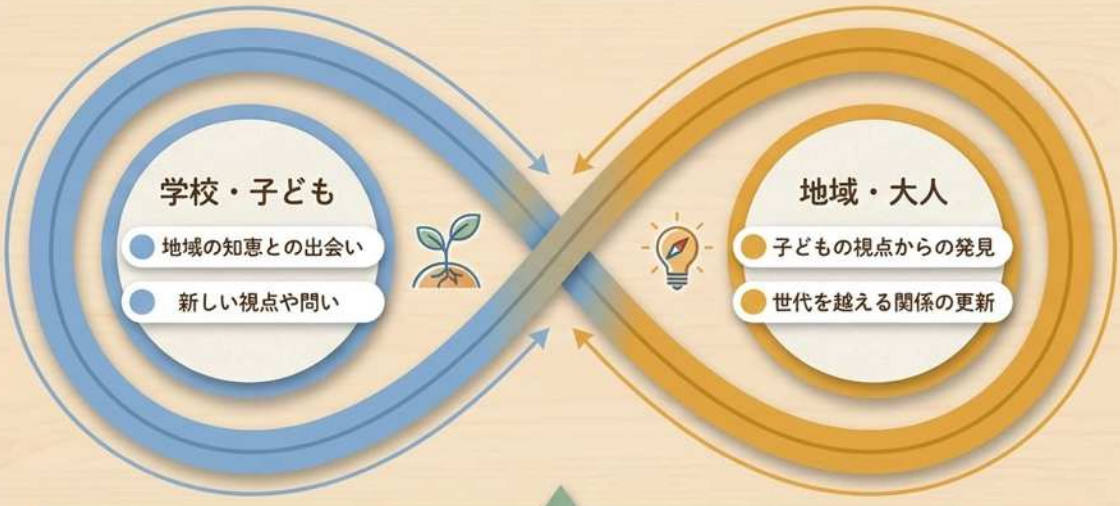
善意ではなく、実際に参加できる仕組みを整える。

学校にも推進員にも、無理を集中させない



分担は丸投げではありません。調整負担や責任も確認する。

学校と地域が、互いに学び合う



学校への一方向の支援から、双方に学びが生まれる関係へ。

第7部｜協働から響働へ

子どもも、学校と地域の当事者になれる



子どもは単に行事へ参加するだけでなく、
考え、意見を伝えられる存在。

※地域の将来を子どもに背負わせるという意味ではない。

CSと協働活動の「学習する循環」



推進員は一人で実行する人ではなく、関係の循環を支える人。

現場からのQ&Aおよびまとめ（明日からの一歩）

学校と地域の協働を、次のステージへ

今ある活動を見直し、子どもの学びと地域の可能性をひらく

Q1. 説明が多く、熟議の時間がありません。



報告・承認事項を整理し、

「今日話したい問い」を一つ決める。

協議の後に次の検討先を確認する。

Q2. 限られた時間で何ができるでしょうか。

新しい活動を
増やす



活動を増やす前に
仕事を棚卸し。



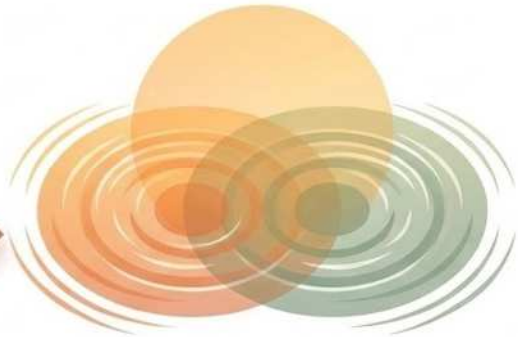
優先順位・学校との分担を確認し、

勤務実態や予算は行政と相談する。

Q3. 地域学校協働活動の協力者をどう増やす？



年間の役割だけで募集しない。

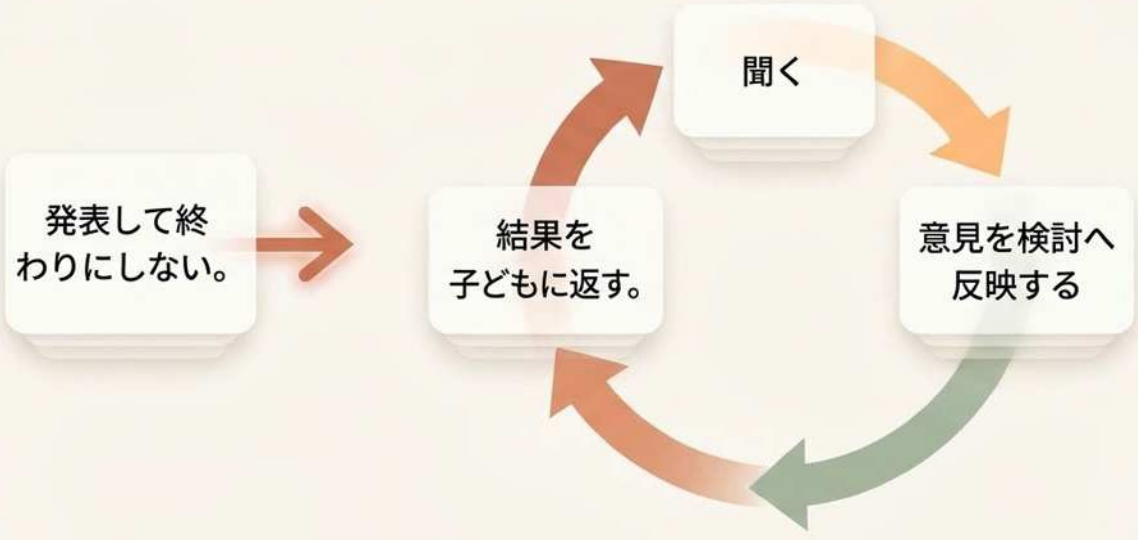


「できること・希望・時間」を聞き、
安全と同意を確かめて入口を広げる。

Q4. 学校からの依頼に応えるだけの状態です。



Q5. 子どもたちを協議に関わらせるには？



まとめ｜明日からの一歩

新しい事業を増やすより、
既存活動の意味と進め方を見直す。

明日から、一つだけ見直してみる

01

CSの議題に
問いを一つ置く

02

身近な人の
できることを聞く

03

今ある活動の
目的を確かめる

まとめ｜学校と地域の未来へ

次の世代に、何を受け渡したいか

今の活動を続ける義務より、
自分たちで考え、選び、
創り直せる可能性を。
学校と地域は、ともに学び続けられる。